

平成十七年四月十日 和敬塾入塾式記念講演

魂のあそびと、漢才のまなび

—— “やまと魂”とは何か

國學院大學名誉教授 國學院大學栃木短期大学学長 岡野弘彦先生

一、「やまと心」と「やまと魂」

こんにちは。(会場より「こんにちは」の声あり)

本日、入塾式にお招きを受けて話をすることにりましたが、当初は本日の演題と少し違つて「やまと心」について話をしてほしいというご希望でした。

実は日本が戦争に負けてしまつてから、「やまと心」や「やまと魂」をテーマにした話を頼まれたり、書くことを望まれたりすることは、ほとんど絶無でした。

敗戦後十年、二十年くらいしかたつていないころは、日本人の「魂」とか「神」「心」をテーマに、書いたり話したりしますと、世間はすぐに「反动だ」「右だ」というレッテルをはりがちでした。

「負けた」ということは、一九四五年の八月十五日に負けたのではなくて、負けて十年、二十年、さらには半世紀たつた後にも、その国の人々の上に、じわじわとボクシングのボディーブローのようにきいてくるものだと深く感じました。

しかしながら同時に、半世紀以上過ぎた最近では、日本民族の持つているみずからの回復力が、また静かな形で動き始めているという思いがいたします。今回、「やまと心」について話してほしいと依頼されたとき、私はそう意外な感じがありませんでした。平安時代には、「漢才(からざえ)」に対して「和魂(わこん)」といい、「和魂漢才(わこんかんさい)」と言っておりますので、「やまと心」を「やまと魂」と言つてもおかしくないわけです。

ただ、私は典型的な戦中派世代です。小学校に入つた年が満州事変の始まつた年、中学に入つた年が日清事変の始まつた年、中学を卒業する寸前の十二月八日に大東亜戦が勃発、そして軍隊生活も体験しました。ただ、もうそのころには日本の敗勢は歴然としていました。中国で六、七年も戦つてきた関東軍の人たちが我々の部隊に国土防備の目的でやつてきて、僕たち年若い兵をいろいろ指導してくれた時代でありました。私どもは、そういう時代のなかで、耳にたこができるほど

「やまと魂」という言葉を聞かされたわけです。「やまと魂」とは、戦いを目的として、自分の命をなげうつことを覚悟で勇敢に行動するとき、大事なものを、ただならぬときの我々の心の大きな支えになる力であるということは、もちろんあるのですが、決してそれだけではありません。

今は、日本人が本来持つているもつと伸びやかな広い心で、普通の穏やかな時代に本当の日本人の特色を持った文化を生み出していく一番根源のエネルギーとしての「やまと心」「やまと魂」というものが必要なのです。

今の日本人の多くは、自分たちの伝統的なものを見事だと思わない傾向がありますけれども、そうではないのです。私は、日本人の本来もつてくるもの、そして日本の伝統文化を見事な形で育ててきた、その一番根底にあるものが、「やまと心」あるいは「やまと魂」であると思います。

ただ、一体「やまと心」とは何なのか、「やまと魂」とはどういうものなのかということが、時代によつてもいろいろ動いております。ことに敗

戦を体験したこの半世紀あまりの間に、実にもうろうとした感じになってしまいました。今こそ、自分たちの祖先たちがよりよき生活を築くために我々に伝えてくれた、その一番根源の心のありようを真剣になつて考え、深く見るときだろうと思ひます。

二、仏教渡来以前の日本人の神的なもの

こういうときに「日本人の神」という言葉が言われるわけですが、私はむしろ神以前のところから問題を考へてみるべきだろうと思ひます。これは別に私自身が考へ出したことではありません。ちょうど皆さん方の年齢のとき、昭和十八年、私は十八歳で國學院大學の大學予科に入りました。その前に、私は伊勢の皇學館大学の中学部で寮生活を五年間おくりました。その五年間で寮生活はなかなかいいものだということは体験的に感じました。

その時代、例えば昭和十五年という年は、当時「紀元二六〇〇年」といわれ、日本中が沸いた年です。当時の私の実感としては、伊勢神宮に附属していたような皇學館の授業では日本文学のとらえ方が学問的に少し窮屈過ぎると思つていました。日本の伝統文学、本當の日本人の心を追求する学問というのは、もう少し広いものであつてもいいはずだと考へていました。もちろん伊勢神宮は信仰の場ですからいろいろと仕方がない部

分もありました。

こう言う誤解を生みやすいのですが、伊勢神宮の中にも意外に仏教的な要素がたくさん入つております。仏教は、キリスト教、イスラム教とともに世界の三大宗教といえます。ただ仏教は、イスラム教やキリスト教のような一神教とは違い、非常に寛容な宗教です。仏教という寛容な宗教が日本へ入つてきて、日本人に大きな感化を及ぼしたということは、たいへん幸福だったと思ひます。

しかし仏教は、緻密な教典と教義、宗教儀礼を持つている大きな深い宗教です。仏教伝来当時、日本人固有の信仰というものは、それほど堅固な形では育て得ていませんでした。そこへ仏教がどつと入つてきて、日本人に大きな感化力を及ぼしたわけですから、日本人の固有の神を祭るその儀礼や宗教的な教義に、仏教的な要素が影響するのは當然のことです。

日本書紀などでは、聖武天皇が「仏てふ神」、つまり「仏様という神様」という形で仏を考へられ、あるいは自らを「三宝の奴」と名乗り、非常に深い仏教信者としての心を持たれたということが書いてあります。また、中古から中世にかけて、神仏習合の信仰、殊に本地垂迹説（ほんじすいじやくせつ）が大きな力を持ちました。日本の神は、その本地である仏が、衆生救済のために、仮に神に姿を変えて、日本の神となつて現れたの

だという思想です。

そもそも日本人にとっての神とは、非常に遠い天空のかなたから訪れるものであり、この日本列島の中ばかりに限られたものではありません。例えば、遠い水平線のはるかかなたを言う「海坂の遠（うなさかのおち）」というふうな言葉があります。あるいは万葉集等にしきりに出てくる「山の際（やまのま）」という言葉があります。「山の際」というのは山と山との間ではなく、山と空との接しているその山の稜線、そしてそこから空に続いている部分です。古代の日本人固有の信仰の神的なものは、そういう海や空のかなたから遠く長い旅をしながら、この日本列島の津々浦々に住んでいる人々に、よりよき生活、より大きな感化、より確かな幸福な生活を与えるために、訪れてくる場合が多かつたわけです。

だが一方で、長い時間の経過のあいだには、やがて自分たちの系図のその祖先の神、つまり日本列島の中で生じた「祖先霊」を神として祭るようになりました。そういう多様な信仰の形が出てきます。

けれども、仏教渡来以前の日本人固有の神的なものは、そういうふうにはるかかなたから来たに違いない。そしてそれが訪れることによつて新しい年が訪れ、新しい「魂きはる（たまきはる）」生命力に満ち満ちた春がやってくる、そして我々

の生活が、一年一年新しく開けていくと考えていました。

例えば、山の落葉樹が葉を落とすと、枯れ木の山、「枯山（からやま）」というふうにあります。古代の人々は一年一年あそこで生命が一つ終わって、それから「魂きはる」という、魂が充実して再び復活してくるといふふう信じていたわけです。その魂の復活は、同時に人間の肉体の復活であり活動の始まりであるわけですから、そのエネルギーの根源をもたらすのが、海のかなた、やがて空のかなたから訪れるのです。

私の先生である折口信夫の古代学によりますと、古代語で海のかなたは「あま」と言い、天を「あめ」と言うように、海と天には密接なつながりがあります。そして水平線のかなたで「あま」と「あめ」は一つになっています。かつて神は、海のかなたからやってきました。やがて古代日本人は、平野から山岳部へ移り住むようになり水平線を見ることができなくなると、今度は、水平線で海と一つになっていた空、そして今は青々と自分の頭の上に海のように広がっている空、つまり「あめ」から神が下ってくると考えました。だから七世紀、八世紀に記録された日本書紀、古事記などでは、神は高天原（たかまがはら）から下ってくるという考え方に統一されてきたようです。

仏教以前から持っていた自分たちの固有の霊

的なもの、それを「かみ」という言葉で言い、また「神（じん）」という漢字を当てたのは、やはり「仏てふ神」というものをはっきりと日本人が認識し始めてからのことです。仏像を偶像化して、宗教の核心に置いていた仏教から非常に大きな刺激を受けて、自分たちの固有の神の姿を形象的にも、内面的からも考えざるを得なくなってきたころから、だんだんはつきりしてくるのだろうと思います。

つまり、対比するものがない場合、自分たちの持っている大事なものは、言葉ではつきりと言わなくても何となくわかっているわけです。はつきりと言葉にする必要がないといつてもいいでしょう。そういう心理は日本人に今でもありますね。外国の宗教学者たちが日本にやってくる、日本人の宗教を研究しようとする、半年か一年ぐらいいで、「わからない、わからない」と言い、がっかりして帰ってしまう場合があります。けれども、「わからない、わからない」と言いながらだんだん惹きつけられ、そして日本人の宗教を深く研究していくという人もいます。

例えば、田舎へ行くとおじいさんやおばあさんが、手を合わせて毎朝、何か拝んでいる。「何を拝んだのですか」と訊くと「のさまを拝んでいる」。「のさまというのは何ですか」「神でもない仏でもない、また神でもあり仏でもある」。そして部屋の高い所には仏壇と神棚がくっついて

祭つてある。その間は極めて自由に行き来しているようでもあり、画然と分かれているようでもあり、よくわからない。よくわからないから「日本人は無宗教な民族だ」というふうに言ったりする人がでてきます。

三、「たま」と「もの」、そして「かみ」

日本人が、仏教以前から持っている、自分たちの固有の神的なものを、一番代表的な言葉でいうと「たま（玉）」と言いました。「たま」というのは、古典にさまざまな形で出てきます。「勾玉（まがたま）」も玉です。それから海岸に打ち寄せられている天然真珠も「しらたま」と言ったりします。

赤玉は緒さへ光れど白玉の
君が装ひし貴くありけり

これは山幸彦と、海神（わだつみ）の神様の娘である豊玉姫との間に交わされた歌で、豊玉姫が自分の恋人であり夫になる山幸彦をたたえる歌です。

「赤玉」というのはサンゴなどが砕けて、海岸の砂で磨かれて赤い玉になったものでしょう。海が荒れた翌日の朝に赤玉が海岸に打ち上げられて、それを拾う。その赤玉を非常に尊ぶのは、形が美しいからというよりは、むしろそういうものに魂が宿っているからこそ尊ぶのです。だから玉

と言ったわけですが。また天然真珠のように、アワビから生み出されたそういうものを「白玉」と言ったのでしよう。

「赤玉は緒さえ光れど」、その海から漂いで着いた赤玉は、そこに通してあるひもまでも輝いて見えるけれども、「白玉の君が装いし」、白玉のようなあなた様が正装なすったそのお姿こそ、よりまさってすばらしゅうございます。こういう意味の、聖なる霊的な資格を持った海神の娘が、その恋人をたたえた歌です。

そんなふうには玉というのは、「魂の宿り」です。だから、体のあらゆるところに古代人は玉をつけるわけです。これは人類共通のようですが、霊的なものを首にも、手にも、足首にも巻き、魂をいっばい自分の体につけて、自分の魂の増殖を図るわけですね。みずからも大きな魂を持っている。しかしその上に、さらにさまざま違った種類の玉を身につける。その玉にやぶる魂が、人間の感覚でとらえられるような形で発揮・発動せられるとき、それを「たましい」と言ったと考えられます。つまり、この世の我々の遠い遠い祖先が、遠い海や空のかなたから大変な長い距離を、人間の生活をより力強く、より清く、より美しく、より豊かにしてやろうと思って訪れてくれる。そういう魂を具体的に内包し、寄りつかせているものが「たま」であり、それが発動するのが「たましい」なのです。

また、そういう古代人の霊的なものを考える言葉の中に、「もの」というのがあります。「たま」と「もの」を厳密に比較すると、「もの」のほうが少し霊格が低いと言っているでしょう。

空のかなた、海のかなたからやってくる巨大な力を持った霊的なものが「たま」です。一方、もう少し手近な、峠や洞穴、沼、木や石など、人間の生活圏の中の地形・地物に宿っていて、時に人間以上の霊的な働きをふつと発揮して、幸福を与えてくれたりすることもあるけれども、また時に災いを与えたりすることもあるものを、「もの」と言ったらしい。「たま」と「もの」というのは、古代人の感覚的な言葉ですが、それが神以前の日本人の霊的な、神のものをいう言葉であったと思っていきたいと思います。

記紀時代になると、そういう「たま」や「もの」に、必ず「かみ(神)」という言葉をつけるようになります。そして「大物主神 おおものぬしのかみ」とか言ったりするわけです。あの三輪山に鎮まっていると言われる大物主神(おおものぬしのかみ)のその名は、いかにも日本人の長い経過を経た、霊的なものをいう言葉の、不統一というか、まさり合った感覚を示しているものです。「おおいなる」「もの」の「ぬし」であり、さらに新しい感覚で「かみ」という言葉を下につけた、「大

物主神」というふうにいる。

「かみなり(雷)」もそうです。あれはひっきり返せばいいので、「鳴る神」なのです。ゴロゴロいって、そして人の魂を震わせる神です。あるいはオオカミは日本列島の中で一番強烈な獣(けだもの)ですが、あれを「大神(おおかみ)」、あるいは「真神(まがみ)」と言ったりする。

明日香のいちばん中央部は「大口の真神の原(おおくちのまがみのはら)」と言います。古代には、あのあたりにもオオカミが出ることがあったのでしよう。オオカミは時に人間以上の力を発揮して、人間を傷つけたりする。あるいは人間を守ってくれる。動物学的にはもう絶滅していますけれども、しかしオオカミを今でも非常に尊敬していますね。だから関東でも三峯山のお守り札には、オオカミの判が黒々と押されています。

これらのことについて、本居宣長が「古事記伝」で見事に整理して、統一的に説明しております。宣長以前は、神というのはいつも「うえ(上)」に置かなければならない、いつも「かみ(上)」にあるべきものだから、「かみ」神だと考えていました。しかし宣長は古事記伝の中で「何であれ、ある不思議な力を備えたものを古代日本人は神と言った」と書いております。さらにそれをもう一つさかのぼれば「たま」と「もの」、あるいは「ぬし」というふうな言葉も、そういう言葉の中のひとつと考えていいのかもしれない。

四、「言霊」について

「たま」の霊的な力により、古代の人々も、自分の生活の上にいる影響、望ましい影響を与えてほしいと願っていました。そういう「たま」はどこに宿るのか。「玉」の中に宿るといふのは、先ほど言いましたけれども、玉はいくら飾りにして、魂を首に手首に足首に、手玉、足玉というふうに巻いていても、本当に生き生きと働いてくれるというには何かまじりこしいという実感があります。「たま」が人間の生活の上に、一番生き生きと細やかに働いてくれるのは、何に宿った場合だと古代人は信じていたか。それは「言葉」なのです。つまり「言霊（ことだま）」です。

ですから、「大和は言霊の助くる国、言霊の佐吉播布国（さきはうくに）」だという。「さきはう」というのは「祝福してくれる」という意味です。この大和の国は言霊の助けてくれる国であり、言葉に宿った魂が助けてくれる国なのだ。あるいは言霊が祝福してくれる国なのだ、古くから言っているわけです。万葉集の中にもその言葉を使った歌があります。

その言霊について、果たして言葉そのものに魂があるのか、という問題があります。もちろん言葉には魂が宿って、そして言葉が魂を発揮する形で、いろいろ人間生活の上に生きて伝播していく

のですけれども、実はそれを発する根源の人に「魂」があるのです。その一番の根源は、海のかなた空のかなたから長い聖なる旅を経てやってくる、折口信夫が「まれびと」あるいは「まれびと神」といった、そういう来訪神です。

古代の人々の心というのは、現代の我々よりももつと距離的に遠い、あるいは時間的に遠い、大きな振幅を持っていたようです。

現代でも、天文学をやっている人は時間的にも空間的にも大きな幅をいつでも心に置いているわけですが、現実の我々の生活は、割合に眼前の時間帯と空間で生きているわけです。ところが古代人というのは、時間的に空間的に、非常に幅広い内的な世界を持っていたと考えざるを得ないんです。

そういう、言葉に宿る魂を最初に発する人、それこそが力を持っているのです。後に「神」という言葉で統一せられていくような、そういう力を持つている人。そしてその人が発する力ある言葉というものがあります。

一方で、縄文時代よりもさらにさかのぼっても、人間が即物的な目的を他者に伝えるために発する言葉、日常に必要な言葉というのは、当然あるわけです。「我飢えたり。イノシシを狩りにいかん」とか、「我なんじを欲す」というふうな言葉

は当然あります。それはそのつど発して、そして一回性の目的を相手に伝えたら、そこで消えていくのです。同じような形で何遍も口に出されるけれども、それは一回性の目的を達したら消えてしまつてかまいません。

ところがそうでない言葉が古代の人々の生活の中にある。それは必ず時を定めて、同じ言葉を、同じときに、同じ場所で、同じしらべ、同じ言葉の勢いで、繰り返されなければならない大事な言葉です。そういう言葉がだんだんとできてくるわけです。そういう力を持った言葉は、一言一句言い間違えてはならない。言い間違えると、かえってマイナスの効果が出てくる。そういう祝福の言葉、祈りの言葉の根源は、遠い空のかなた、海のかなたから訪れた聖なる訪れ人、つまり神様が発した言葉なのだと考えられました。

五、女性の聖性

それに対して、人類共通の傾向のようですが、古代にさかのぼればさかのぼるほど女性が最も聖なる資格を持っているわけです。神の心に一番近づき、そして神の心を感じ取り、神の言葉を聞き取ることでできる力は、古典の中に断片的に幾つも幾つも出てきますけれども、それは女性です。女性が第一次の「まつり（祭）」によって、神の啓示のこもった言葉を知り、そしてその女性から、夫あるいは兄弟に神の言葉が伝えられる。つまり

魂の宿った言葉が伝えられて、男性が第二次の「まつりごと（政治）」を行う。

「まつり」というのは、その神の心を自分の心に感ずることです。それが第一義の「まつりごと」です。それから第二義の「まつりごと」というのは政治です。神の意志を現実世界に実現させようとするのです。聖なる自分の妻、あるいは自分の女きようだいから聞いた神の言葉を、現実を実現するのは男性の仕事です。ですから古代から実際の政治、第二義の「まつりごと」の政治は男性が司っていました。しかし、最も神の心に従ったまつりごとをする根源の力は、女性が持つていました。

その聖なる女性の代表は、宮廷生活を考えてもいけれども、むしろ古代の東歌（あずまうた）に残っている村々の生活を見ると、家々の主婦役です。いわば主婦が、その家の宗教の神主さんのようなものです。それを「家刀自（いえとじ）」といいます。東歌を見ますと、新嘗（にいなめ）の夜、つまり新穀の感謝祭であり、神と人とが一体になって新しいエネルギーな新米を一緒にいただき、神に感謝して、そして人間もおそそ分けをいただくという夜。そういう夜は、家刀自は一人だけ家にこもって、訪れてくる神を待つわけです。亭主も外へ出してしまふ。そして今年の米をいただいたその感謝の祭りをします。そこで歌が交わされ、そしてお祭りの儀式が行われ、そ

してその日を予測して理想的な醸造状態になるようにお酒を醸造しておく。酒を醸すため、村の乙女たちが口々に米を飲んで、そしてかめに吐き入れて、発酵させて、そして理想的な発酵状態になれるように、あらかじめ計画してつくっておく。そういうのを「待ち酒」といいます。神を待ち受けて、醸造しておく酒ですね。「酒をかむ」とか「醸（かも）す」とかいうのは、そういうふうにして発酵させたからです。

そういうふうにして家刀自、つまり家の主婦が神様のおそばに仕える。その形とその心をさかのぼっていけば、神の一夜の妻になるということですから。新嘗の夜とは神と聖なる乙女が一体になる、合体する夜なのでしょう。そういう心の名残は、そのつもりで読み分けていくと、平安朝あたりの物語にも、あるいは和歌の上にも、その気分がまだほのかに伝わっています。伊勢の斎宮、賀茂の斎院には、必ずその当代の天子様の内親王様がおりになるのが基本ですけれども、それはどんな男の神主さんよりも実は神に近い形だからなのです。

そしてそれが物語の女性の主人公になっていきます。神から聖なる言葉を聞いた乙女と、その言葉をそのまま実現していこうとする、政治の第一面に立つ理想の男性との間に、源氏物語のような深い恋物語が展開していくのです。源氏物語を、淫乱小説だとか、不道德な小説だとかというふう

に読むようになったのは、漢学者あるいは仏教学者たちであり、ひどい場合には、レイプ小説というふうにするのは、現代の非常に心衰えた源氏読みの人たちです。

このような私たちで、大きな幸福の力をもたらしてくださった神に、乙女が感謝し、それからさらに「こういうことをまた新しい年にお願ひいたします」という願ひの言葉を言う。それに対して神が、「こういうふうに住生活していきなさい。こういうことを守りなさい」と言い下す。その神と人の会話の言葉は一回で消えてしまっている言葉ではありません。毎年同じ場所で、同じ季節に、同じような「しらべ」で、繰り返し繰り返しせられなければならない言葉です。

もちろん長い年月の中には、少しずつその言葉も変わっていきます。新しい条件が加わってきたから、新しい願ひを言うようになり、その新しい願ひをかなえる言葉がまた神のほうから言われるようになるでしょう。だから少しずつ変わっていきます。あるいは無意識に言い違いをすることも時にはあるでしょう。ですけれども、それは本当は変わらないはずの言葉です。一回限りの日常会話のような言葉と、そういう力のある、魂のこもった永遠の言葉は歴然と違うわけです。それが後の日本人の和歌のルーツとなります。

六、和歌と物語

私は今でも、現代文学の一ジャンルとして短歌をつくっています。その心構えとしては日本人の、伝統的な、一番自分たちの生活を、よりよく、より力強く、より豊かに導くような、その根源の定型叙情詩を作っているのだと思っております。ですから、やたらに現代風な外来語を使ってみたり、漢語の音の熟語を一首の歌の中に二つも三つも使ってみたりするようなことは、私はしない。それはまずしらが大事だと考えるからです。

しらべというのは、単純にリズム感だけでは済まないですね。日本人の心のうねり、それが言葉と重なり合ったものが、しらべだと私は思うんですね。そういうしらべに乗せて、自分の知っている言葉の中の、最も力ある言葉、最も美しい言葉、最も豊かな言葉を、たくさんの語彙の中から選びに選んで、そして自分の言おうとする思いをあの短い定型の中に凝縮して表現する。

先ほどから、言葉に力が宿ると言っていますけれども、しかし心理的にはしらべが一番大事です。意味的な内容を持つ言葉は、もちろん大事です。ただ、言葉の意味にあまり頼り過ぎると、しらべがおろそかになったりする。しらべと意味のどちらをより重く考えるかと言われたら、私はしらべをより重く考えます。

ところが、言葉の意味にあまり重点を置き過ぎますと、近代短歌のように、ヨーロッパの詩の一行に近づくのがいいという考え方になったりし

ます。そして意味が優先されるような、器用につくり上げた歌がいいという評価が出てくる。現代詩や現代小説は、近代になってヨーロッパから新しい手法を教えられたわけですから、やはり新しく変わっていったほうが、魅力を感じる部分が多いでしょう。しかし和歌、短歌は日本人の「根生い（ねおい）」の文学であります。

俳句は四百年ほど前に短歌から分かれました。俳句は短歌的な情念を軽くしよう、もうちょっと人間の楽しみを楽しようという方向へ行つたわけです。短歌と比べてみると、そういう伝統的な情念というものを俳句は濃密に持っている。だから、いま、戦後の軽い時代には、俳句のほうがはるかにはやるわけですけども、心の脈絡をたどって古くさかのぼっていくほど、和歌のほうが大事にされていきました。

言葉と、その言葉を大事なしらべに乗せて、そして自分の感情を凝縮して表現する。もともとは神様をお願いする。そして神様が言い下してくださる。その神と人間との間の問答であったものが和歌です。ですから、その単語ではなく、しらべに乗せて歌い、やがて五七五七七七という定型意識を固定させてくる和歌の中にこそ、魂が、玉が、宿っていると日本人は考えてくるわけです。ですから日本人にとって和歌とは「和するもの」「ダイアローグ」であって、「モノローグ」、つまり自分だけでひとり言を言っているわけではないの

です。必ず、神様に、あるいは自分の愛する人その人の魂を獲得したいと思う恋人に対して、非常に強烈な情念を込めて発するものです。そうすると相手がまたそれにこたえてくれる。その「和するための歌」、それが和歌なのです。

正岡子規以降、近代の和歌は「短歌」と言うようになりました。不勉強な歌人の中には、和歌は古風であり、現代の我々は短歌をつくっているのだ、和歌と短歌は別物だと言ったりする人もおります。そのような人は日本文学史を勉強していない人だと思いますが、既に万葉集の中にも和歌という言葉がある。これはいま言ったように「こたえる、和する歌」ですね。そして長歌に対して、五七五七七で短く終わるから「短歌」といっている。これも万葉集の中に既に分類の言葉として使っております。和歌も短歌も同じものをいっているわけです。短歌のほうが新しくして和歌が古風ということは全くない。

だから現代でも、古典である古代歌謡から万葉集、古今集、新古今集というように和歌を学問的に研究しておられる人の中には、これをちゃんとわかっている、「日本和歌史」いうふうに和歌という言葉を使われる方が多いのです。

それからその和歌だけではなくて、ちょうど建築の柱のように最も濃密に叙情を訴える和歌を核にして、その由来、いつどこでどういうことがあって、どういう目的でだれがこの和歌を歌われ

た、だれに向かつて歌った、そしてその結果、こういう反応がまた相手の女性なり男性なりから返ってきた、そして結末はこうだった、めでたしめでたし、ということの一部始終語る「物語」があります。これもさかのぼれば神話といつてもいいわけです。その中にもまた魂が宿っています。

物語という形で語るものと、歌うという形で凝縮したものと比べれば、歌のほうがはるかにコンパクトで強烈です。折口信夫は、「歌というのは相手に『訴える』から歌だ」と言われました。僕はもう一つ、相手に衝撃的に魂をぶつけるというふうな、『打つ』という言葉から歌という言葉が出てくるのだろーと思えます。そういう歌、あるいは物語に魂が宿る。そしてその歌を歌うことによって、また、物語を語ることによって、その中に込められた望ましい魂が望ましい影響力を与えると考えてきているわけですね。

お手元の資料の一をご覧ください。例えば、万葉集の巻の三の中に出てくる

否いなといへど 強しふる志し斐いのが強しひ語り

このころ聞かすて あれ恋こひにけり

(万葉集巻三 天皇御製)

これは天皇の御製となっていますが、どの天皇

だということが万葉集の中でははっきりと書いていないのです。女帝の持統天皇だというふうな推測する説が一番多いのですが、あるいはひよつとすると天武天皇かもしれないし、文武天皇かもしれない。いずれにしてもそのころのことです。この歌を歌いかけられた志斐姫（しひのおみな）というのは、中臣氏に所属する語り部のおばあさんです。そのおばあさんの返歌

否いなといへど 語ことれ語ことれとらせこそ

志し斐いは申まをせ 強しひ語ことりといふ

(万葉集巻三 志斐姫)

万葉集を見ていると、こんなふうには天皇と語り部のおばあさん、あるいは天皇と皇后、あるいは天皇と神に仕える女性、あるいはもちろん友達同士、恋人同士のやりとりが、ふんだんにあります。相手に伝えたい自分の本当の心を伝える、日本人の一番典型的な方法は、和歌で心を伝え合うことです。

「否いなといへど強しふる志し斐いのが強しひ語り」。これは「もうおまえさんの話なんか、同じ話を繰り返し繰り返し何遍も聞かされて、嫌きらだと言うのに、まだお聞きなさいませ、もつとお聞きなさいませと言いって無理強しいにする」という、その志斐のおばあさんの強い語りという意味です。

つまり、まだ幼い、あるいは年若い、やがて天

皇にならなければならないような王子や王女に、古くからの神話を繰り返し語る。そのことが若い貴人の魂を太らせ、大きく深くたくましく、そして浄化します。そのための一番効果ある方法なのです。もう天皇になってしまわれた方には、今さら語ることもないわけです。

「このころ聞かすてあれ恋こひにけり」。「随分久しぶり、もう聞かなくて、このころ恋こひと思おもうよ、聞いてみたいと思おもうよ」というふうな歌を、昔もそうでしたが、今はいつそうおばあさんになっている、その志斐の語りの姫におやりになった。

そうしたら、こういう語り部のおばあさんは言葉表現が非常にたくみですから、すぐさま「否いなといへど語ことれ語ことれとらせこそ」と、「もうこんな同じことを何遍も何遍も申し上げるのは嫌きらだと言いっておられますのに、もう一遍お話し、もう一遍語ことつてよ、とおおしやいますから、それで私は語りましたんでございますよ。それを今さら無理強しいに語ことつたなどとおおしやるのはひどうございませよ」と返しております。

このころは和歌の形であれば、かなり自由にかかったり、あるいは冗談冗談ことに託たくしたような形でお互いの心の思いを伝えることができました。かなり思い切ったことを言いつても、ゆかしく伝つわるわけですね。これは古代からの歌と物語の持っている特色です。

もちろん万葉集のころ、人麻呂などは恋人に対

しては必ず和歌で、あるいは時に長歌で自分の思いを伝えている。相手からもそういう形で返ってくる。平安時代になってもそうですね。あるいはもう少し時代が下ってもそうです。歌が詠めなければ恋一つできないわけです。今はイージーで、短歌なんか全然どこで切るのか、切るところもよくわからない、ケイタイで暗号やかたことのような言葉を交わすだけで、けっこう仲のよくなる男女がごろごろいるわけです。でもそのかわりすぐに別れてしまいます。つまり言葉の魂で結ばれていませんから。本来は、こんなふうに物語も歌と同じく魂を宿しているものでした。

神話の中の須佐之男(すさのお)が八岐大蛇(やまたのおろち)を退治して、奇稲田姫(きしなだひめ)というお姫様を助けて、そして二人が結婚して、めでたしめでたしとスイートホームをつくれた、そのときの歌。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠つましみに
八重垣つくる その八重垣を

この歌を百五十年ぐらい前までの日本人は、ずっと「神詠(しんえい)」と言っていました。

信仰の上では須佐之男の神様がみずから歌われたと考えてもいいけれども、実証することは

できません。神話の中でそういうふうには伝えるから、須佐之男の神がお詠みになった神の歌(神詠)なんだというふうに考えたわけです。これは中世あたりになってもまだあって、石清水八幡の神様が歌われたとか、仏様が歌われたとかというような歌が、勅撰和歌集の中にも幾つか出てきます。

先ほどからお話しているように、力ある歌は神の口から発せられたものです。だから、仏様も日本へ来ると、人々の心を済度・救済するために力ある歌を和歌の形で歌われるのだ、というふうに考えてくるわけです。そして勅撰和歌集、つまり天皇の命令によって選ばれた最も権威ある、その時代の代表的な和歌集に、北野の神様が、あるいは石清水の神様が、あるいは比叡山の仏様がお詠みになったという歌が出てくるわけです。

阿耨多羅三藐三菩提の仏たち
あのくたらさんみやくぼだい

我が立つそま袖みょうがに冥加みやがあらせたまへ

これは、比叡山の仏様が詠まれたというふうには伝えたりしているわけです。

神様の歌の中にも、ちよつとお気の毒なような歌があるんです。

夜や寒き 衣や薄き 片そぎの

行きあひの間まより 霜やおくらむ

神様も冬の夜は、あんな簡素なお社の中で寒いだろうと人間のほうが想像して、このような歌が神様がお詠みになったというふうには考えられたのですが、恐らくお社に仕えている巫女さんが神がかりして、神の意志を伝えるという形で歌うのでしょう。それが神様の歌ということになるわけです。北野のお社の神様だとか、あるいは八幡神も、よく歌の形で託宣を下される神様です。

そんなふうに、古代から日本人は、一番権威ある歌、一番豊かに魂の込められた歌は、神みずからが歌われたと信じていました。そしてその一部始終を語る物語の中にその歌を包んで、そして後世まで語り伝え、歌って聞かせて、その神話の魂、それから神話の中の一番魂の凝縮された歌の魂が、それを聞いていた人々の上に働きかけるということを大事にしたわけです。だから「ものごと(物語)」というのは、その名前が示しているように「魂の語り」なんです。そしてその物語の一番のエッセンスは、一番濃密に叙情を伝えている、心を伝えている和歌なのです。

七、外来文化の受容について

仏教が日本に伝来し、まず都の知識階級に広がっていき、それから儒教が普及していく。ことに

漢字、漢文・漢詩というふうなものが七、八世紀あたりから都を中心とした上流知識階級の間、大きな影響力を持つていくわけです。その知識階級の男性たちは、まさしく漢才（からぎえ）を身につけた人たちです。それに対して、和歌を核にした日本的な魂を身につけていることを「和魂」というわけです。

こういうことは人類共通といってもいいのでしようが、この小さな島国の日本列島に住んでいた人々は、古代から現代に至るまで、外から来た知識、宗教、文化、文学等、新しくやってきたもののほど魅力を感じるところがあります。そしてそれらの外来文化が人びとの上に強烈な影響力を持つわけです。同時に、一時自分たちの持っていた伝統的なものを非常に軽んじたり、おとしめたりして、外から来たものに心酔するわけです。これはある意味ではいつの時代でも日本人が持つ特徴でもあります。つまり良い面でもあり、同時にまた日本人が非常に深く反省しなければならぬマイナス面でもあります。

ですから仏教、儒教が入ってきて、およそ三世紀間くらいは、もうその外来のものに心酔するわけですね。またあのころの日本人にとって、仏教あるいは漢字を中心とした漢文学、漢文・漢詩というふうなものが、どれほど魅力的であり驚異の対象であったかということは、近代のヨーロッパの思想や文学、芸術に感動した我々の祖父、我々

の父、そして我々を考えてみてもよく分かると思います。まして古代のほうが、大陸の宗教や大陸の文字の漢文学に感じた驚きこそ、どれほど大きかっただろうと思います。ですから、日本の伝統的な物語、和歌を核にした、和魂（やまと魂）の価値というものが、奈良時代の少し前から奈良時代のころには、非常に軽くなるわけです。

そして聖武天皇でさえ「三宝の奴」というふうな仏教に心酔なさる。そして文学面にあらわれるのは漢詩・漢文の重用です。ことに男性の書くものは漢文でなければならぬし、男性の書く詩は漢詩でなければならぬ。男性ばかりではなしに、有智子（うちこ）内親王という方は女性でありましてけれども漢詩の名手でした。そして勅撰漢詩集というものが何冊も宮廷の中で編集されます。実は日本人の詩の歴史の中では、勅撰漢詩集のほうがはるかに優先的に高く評価せられていたわけです。それですから紀貫之は、古今和歌集を編纂して和歌の伝統を巻き返そうとして非常に努力した人です。

この序文の中で、貫之は、「一時、和歌の価値なんかは色好みの家に埋もれ木のごとくなくなってしまった」と書いています。実際の恋の場面では、やはり和歌が非常に重用されるわけです。だから「色好みの家に埋もれ木のように」なってしまった。表立った紳士の文学としては、漢詩ばかりが重んじられるようになって、和歌は非常に軽んじ

られてしまった。しかし本来を考えると、そんなわけではないのだ、というふうにして、先ほどの「八雲神詠」をはじめ、古くからある歌が日本人に大きな力を与えていたことを序文の中で書くわけです。そしてその中でお手元の資料の三「安積山」の歌と四「難波津」の歌を、「歌の父母（ちちはは）」であって、昔からこれを手習いの初めに必ず習ったものだというふうに書いたのです。

安積山 影さへ見ゆる山の井の
浅き心をわが思はなくに

難波津に咲くやこの花

冬ごもり今を春べと咲くやこの花

「安積山」の歌は、実は万葉集にも出ています。「難波津」の歌は東大寺の落書きの中に残っているのですけれども、確かな出典というものは今のところありません。

手習いというのは文字を習うわけです。やはり日本人の漢字、漢文に対する非常に深い驚異、感動の心というようなものが、今度は字を習う際に、漢字を楷書、草書、行書というふうな形で習っていく。習うことははじめは技術として学ぶのです。そういうふうな技術的な段階から、だんだん心の深まりへ日本人は進んでいく。ですから単に格好のいい字を書ければいいというのではなくて、習

つていくうちにその字の持つている魂というものを感じていくわけです。言葉に魂があるのと同じに、文字にも魂が宿っているという考え方です。ですから字を習うということは、その形をなぞるだけではなくて、おのずから魂を深めることであり、そして魂が深まっている人は、理想的な字が書けるというふうを考えていくわけです。

古代日本人たちは、まず表意文字である漢字を表音的に使って、自分たちの心を伝え、表現しようとしていました。また漢字の草書体から平仮名を、それから漢字の省略体から片仮名を生み出したように、より身近になるよう文字を工夫していくわけです。日本人は外来のものに非常に心酔するわけですが、しかしただ心酔するだけではないということ。何世紀かかけて、やがてそこから自分たちに合った形の心の表現というものを見出していくわけです。そこが日本人のなかなかすばらしいところです。

新しく入ってきた外来のものに、自分たちの本質を失いかけるほど夢中になり過ぎるところがあつて、ここはちよつと反省しなければならぬ。ですけれども、やがてその中から本当に自分たちの身に合った魂に響き合うものを生み出していくということ。です。

難波津に咲くやこの花

冬ごもり今を春べと咲くやこの花

難波津の歌は作者がわかりません。仁徳天皇だと伝説的に伝えられたり、あるいは日本に千字文を初めて伝えた王仁（わに）という学者の詠んだ歌だと伝えていたりする、非常に伝説的な歌です。つまり物語的、神話的な背景を持つている歌です。その難波の港に「咲くやこの花」、つまり「いま見事に花を咲かせているこの花」。古代の歌というのは多義性を持たせませんから、「この花」というのは、「今見ている目の前の花」であり「木の花（このはな）」でもあります。難波の港に見事に花を咲き出している「この花」。

「冬ごもり今を春べと」とは、「長い冬の非常に鬱屈した時期、それが過ぎて魂の発揚する、發揮する時期がやつてきて、そして見事に花咲いているこの花よ」。これはいろいろな象徴的内容、つまり仁徳天皇が難波の都を開かれた、そのことをたたえている歌だというふうにもとれるわけです。あるいは海のかなたから渡来してきた文化が日本で時を経て、やつと花咲き始めたというふうなことにもとれるわけです。とにかくそういう祝福の歌ですね。

「安積山」の歌には物語的な背景がありまして、葛城王（かつらぎのおおきみ）という人が陸奥（みちのく）へ使わされたときに、その土地のお役人があまりいい待遇をしなかつたので、大変ご機嫌が悪くなった。そうしたら、その宴会に出ている

若い女性が、

安積山影さへ見ゆる山の井の
浅き心をわが思はなかに

こういう歌を即座に詠んで、それで葛城王の心がなないで、和やかになった。宴会というのはお祭りの延長ですから、賓客はそこで神の代役をするわけです。その神様である都からの賓客のご機嫌が悪くなったので、それを鎮めるのはその宴席にいる聖なる女性の役割です。

つまり貴人の、あるいは神の怒りを鎮める力のある歌、そういう魂を宿している歌ですから、この二首の歌を必ず手習いの初めにするのだ。そして和歌の父母のようなものだと紀貫之は言っております。そんなことを考えますと、和歌の中に、物語の中に魂が宿っていると信じた日本の古代の信仰が、非常に大事なものだということがおわかりだろうと思います。

八、やまとたけると戦中の若者

しかし、古代の話ばかりしたのではしようがない。それでは現代にどう続くか、このことをいつでも考えないと、古代のことを話す意味はありません。そのことを常に考えながら古典を読まなければ、古典を読む意味もないのです。私が、そういう日本の言葉あるいは歌、物語というふう

なものに宿る「やまと心」「やまと魂」というものを一番身近に感じたのは何かといいますが、これは古事記の「やまとたける(倭建命) 神話」の中の語りの部分、それから歌の部分です。

その内容を簡単に言っておきます。やまとたけるは、少年のころは、幼名「やまとおぐな(日本童男尊)」といいます。父の景行天皇から、その非常に猛々しい心を警戒されて、筑紫へ行き、筑紫の「くまとたける(熊襲建)」を討伐してこいと命じられます。このとき、やまとたけるはまだほんの少年です。送別の際に、叔母の倭比売命(やまとひめのみこと)が、自分の着物を与えてくださる。これは着物には魂が宿る、つまり魂の宿りだからです。それを持って筑紫へ行き、叔母の贈り物である着物を着て、つまり女装して、宴会の席に紛れ込み、宴たけなわなるころに、短刀で熊襲建をズブリと刺しました。

そうすると、さすがに剛勇の熊襲建です。熊族襲族といって今の鹿児島から宮崎県のあたりに分布していた豪族の長です。熊襲建は、自分が刺されたとき「自分ほどの剛の者を討つあなたの名前は何とのか」と訊いた。やまとたけるは「やまとおぐな」つまり大和の若者と名乗りました。そこで熊襲建は「これより後は、『やまとたける』と名乗られるがよかろう」と自らの最期のときに、はなむけをするわけです。つまり、熊襲建という非常に剛勇の魂を持つ熊襲族の統率者

の資格、その魂のこもった「たける(建)」という言葉を、「やまとたける(倭建)」とお名乗りになるがよかろう」と言って、命の瀬戸際に、祝福のはなむけをする。そして、やまとおぐなは、やまとたけるとなつて大和に帰ってきました。

そうするとまた父の天皇は、出雲へ行つて、出雲建(いずもたける)を討伐してこいと命じます。これも知恵を働かせて出雲建を討伐する。帰つてくると、三たび、東国を平定してまいれとおっしゃる。ほとんど軍勢も下さらないで、東国を平定してこいと命じられました。さすがのやまとたけるも、伊勢の斎宮をしておられる叔母の倭比売命を訪ねて、涙をこぼして訴えるわけです。「我が父は我に死ねとおぼしめすか」、この言葉を二度繰り返して涙をこぼします。倭比売は火打ち石と、火打ち袋と、天叢雲の剣(あめのむらくものつるぎ)という、あの八岐大蛇の体内から出た剣を与えて、そして心を奮い立たせて東国へ立たせてやるわけです。

やまと東国を平定して帰ってきますけれども、大和まではたどり着けなかった。伊吹山の山の神を討伐しに行つて、そこで山の神の靈氣に負けて力尽きて、伊勢の平野部で亡くなるわけです。その魂は白鳥になって空をかけて、河内から大和へ飛んでいきました。さらに空へ飛び上がっていくわけですが、ほかに歌がありますけれども、その最後の代表的な言葉が、

大和は 国のまほろば

たたなづく 青垣

やまこもれる 大和しうるはし

(古事記 やまとたけるの命)

こういう歌もはじめから物語とついているわけではありません。もともとこの歌は、大和に古くから伝えられている、大和の国褒めの、年の初めの祝福の歌です。それをこの物語の中で、やまとたけるが命の最期に歌ったというふうな形で、やまとたけるの神話の中に取り込んでいるわけです。その効果は見事ですな。

そこなのです。皆様がたは、そんな話を聞いても何も感じられないでしょう。それは今がわりあいに平和な、幸福な時代だからです。私が十七歳、十八歳、十九歳という年、本日のような式典のときには、年配の人たちから「今こそ、おまえたち若者は潔く戦場へ行つて死んでこい。天皇陛下のために、この皇紀二千六百年の輝かしき歴史のために、命をなげうつてこい」と、事あるごとに繰り返し繰り返し言われた。言葉を変え、言い方を変えて繰り返し言われた。一番敏感なのは、やはり若者なんです。

昭和十九年になると、もう敗色は歴然としていました。私たちは豊川海軍工廠へ働きに行きまし

たが、その工廠長の海軍少将は、南方の海戦でさんざんに負けてきて、そして工廠長になった人でした。「日本の海軍はもう跡形もなくなっている。四〇ミリ機関砲の銃身一本でも、あるいはその弾一つでも、一日でも早く送ってやらなければもう日本は危ない」ということを、大本営発表とは全然違った内容の話を全国の大学から集まってきた我々に一時間話してくれた。我々は「ああ、おれたちもいよいよやまとたけるか」と思いました。つまり、こんな途方もない古代の神話の中の一人の若者の心が、その魂が、我々の心にそのまま入ってきた。「おれたちは現代のやまとたけるだ」と思った。それは実に物悲しくもあつたけれども、同時にあるさわやかさを持つていた。何の償いも期待しないで、おれたちは死んでいこうと思つた。それは戦中派の者たちしか身にしてみても体験しなかつた思いです。それで階級が上がるとか、それでどんな報いを受けようとも思わなかつた。もうおれたちがとにかく真つ先に、ただ突つ込んでいって自分の肉体とともに魂を散らさなければ、日本はもう守れないじゃないかと思つた。

恐らく今度のイラクの戦争のときの、あのジハードの若者たちというのは、彼らの心の中にも、きつと日本人のあの特攻の心があつただろうと思つたのです。アメリカは真珠湾を憎悪の対象にしますけれども、イラクの若者たちはまた違つて考えだろつと思つた。

その中で私よりもまださらに若く、そして十七歳、十八歳で命を散らした少年航空兵たちと僕は、幹部候補生の教育隊でしばらく同じ兵舎で過ごしたことがあります。その彼らの思いを挽歌につくりました。それをこれから読んでみます。

皆さん、これからの寮生活の中で、一人で、あるいは集団で声に出して読んでくださる気持ちがあつてきたら読んでみてください。ただ、いま私は私の読み方で読んでみます。短歌とは少し違う「旋頭歌」という五七七五七七という形、これはもう万葉集で滅びたといつてもいい形ですが、それを私は意図的に復活させて、彼らの心を歌つてみました。はじめの敷衍は言葉書きです。物語を要約したようなところから、古語をとるところで使つていきますから、意味のすぐおわかりにならないところもあるでしょうけど、それは古語辞典を引いてみてください。

旋頭歌 若葉の霊

※「歌壇」平成十二年八月号から

戦の苦しかりし年、短き命の末期を生くる稚き少年航空兵らと、ゆくりなくも同じ兵舎に過し日々の思ひ、いまさらに胸によみがへりきて耐へがたし。彼ら十七の齡にして帰らずなりしみ霊

の鎮めに、かつがつ詠みいづる歌。

死ぬる目を 待つ明け暮れの 命しづけき
散りいそぐ 花のあはれの 身にしみるまで

うら若き 友を愛しと 思ひそめてき

明日しらぬ 命の果ての 酒くみかはす

咲きみつる 花野を踏みて たち征きにけり

少年の 頬のくれなゐは 花よりも濃き

相撲わざすまひ 胸すくほどに 人を投げきて

息あらく 砂に臥しある 胸たくましき

語らひの 相寝あひねの浜の 草やはらかし

稚き子が 恥ぢらひて伸ぶ その脛こぶら

果てゆきし 齢よはいやあはれ 十とをま余りななつ

かの子らが 沈める海のみぎりま蒼き

水無月の 闇の夜声に ひびきくる呪詛

血塗ちあへたる 若き骸は しづまりがたし

大空に 青き尾を引く 夜這ひ星あはれ

亡き友を 呼ばひもとめて 帰る空なき

一途なる 思ひのこして 果てゆきにけり

いつの世も 若きいのちは あざむかれ死す

清き死を 悔しみて来し み掘べの道

まかがやく 白鳥の仔は 孵りゐにけり

純すみの男をの すがしきままに 死にゆきにけり

独り神 わがすさのをや さびしかりけむ

かへりこぬ 友の屍かばねの なれる果て見ゆ

黒髪の 沖つ藻なして 水漬くさま見ゆ

軍神と いはるることの あはあはとして

老い母は すべなけれども 空に祈らむ

倭やまとをぐな 吾妻あづまを恋ひて 哭ななきたまひき

今の世の 若き神らは 吾妻すら持たず

世の末の むごき戦に 命ほろびぬ

隠り世の あまりさびしと 泣きしづむらし

彼らみな 海の底ひに 潜かづきはてにき

魚鱗いりこなす わたつみの宮の 恋だに知らず

死にし子の 眼もとすずしき 写真うっしあの下

たらちねは 老いおとろへて めざり寄りゆく

たたかひに 肉しむら焦けて 死にしわが子を

うつし身は 思ひなげきて 老い果てにけり

後の世の 若き心の ほろびゆくさま

われらみな 眼前まきめに見つつ 死なむともせず

悔い多き 世をながらへて 老いに到りぬ

怒らじと こころは思もへど 死にがたきかも

最後の二つは自分の述懐です。こういう若者たちが特攻隊員になって、真っ先かけて突入していった。私の同級生にも、特攻隊長となって敵艦に自爆して、二階級特進で大尉になっている人もいます。私もやっぱり陸軍特別操縦士官を志願しま

したけれども、父親が郷里から出てきて、「死に急ぐな、どうせ赤紙が来るんだから」と言っで一晩かけて私を説得しました。明け方になって、どうしても私が言うことを聞かないから、「行くのならば縁を切る、親子の縁を切る」と言われました。その時、「最後に親不孝をして親子の縁まで親に切らせて死に急ぐことはないか」、そう思いました。それで赤紙の来るのを待つて出征してゆきました。

しかし、もうそのときには日本はどん底の状態になっておりました。ですから茨城県の海岸でタコつぼ塚を掘って、明けても暮れてもそこに身を潜めて、小さな爆薬を胸に抱いて、上陸してきたアメリカの戦車のキャタピラに飛び込む訓練ばかりしておりました。そういう時代があったというところも歴史の上の事実でありまして、そういうときの若者たちの心を支えたのは、やっぱり長い日本人の本当の命の心底のところを支えてくれた、そういう魂であったわけです。

九、魂のあそび

穏やかな元禄の時代に、本居宣長は

敷島の大和心を人とはば

朝日にほふ山桜花

というふうに歌いました。そして人が意味を聞く

と、「そんな格別な意味があるわけではない。日本人の心と桜の花の美しさを歌っただけさ」と言っておりました。まさしくそうだろうと思えます。穏やかな時代には、我々の心は穏やかに、この上もなく豊かに美しく香り出るような心を持っていくようにすればいいわけです。しかし一たび国が、その民族が興亡をかけて戦わなければならなくなつたときには、無心になって守るべき者を守る心になっていただきたいと思う。それが「やまと心」というものであります。

平安時代に「和魂漢才」ということをしきりに言い出してきました。外来の知識や技術、これが「漢才」です。「才」とは学ぶものです。「まねをする、まねる」ということから「学ぶ」という言葉は生まれています。「才」とはまねして学び取るものです。そして「和魂」「やまと心」「やまと魂」は、「あそび」によって身につけるものです。あそびというのは、心の非常に自由な学び、あるいは深めなのです。「魂のあそび」なのです。

中世あたりまではまた日本人はよくわかつていたのですけれども、時代が下ってくるにつれて、そして近代になるにつれて、あそびと学びが逆転してしまいました。「学べ、学べ」「まねしろ、まねしろ」というだけを大人たちは言うようになって、本当の魂の自在な深まり、あそびという心を忘れてしまいました。西行も中世の人ですけれども、吉野山へ行つて桜を見ると、本当にあそびの

心が深々として感じられた人です。私は数年前、

咲きみちて 胸せまりくる はなの山

西行のごとく われはあそびず

という歌を詠みました。

「われは遊ばず」とあるので、「岡野さんは勉強ばかりしているのですね」と多くの人は言いました。そうではない。吉野山へ行つて、一番「やまと心」の象徴のようなあの山桜を見ても、私の心は、心底本来の日本人のような魂のあそびを深めることは、西行から比べるともう十分の一、百分の一しかないなあ、と思うわけです。

私は「西行のごとく われはあそびず」と詠みました。でも皆さん、やっぱり日本人は魂のあそびを、それぞれの時代の生活の中から深めていくて下さい。そうしないと日本民族は、あるいは日本は滅ぶかもしれません。今のような状態のまま、ずるずると行ったら、本当に大変なときが、どん底が来るだろうと思えます。少しでも早く、日本人本来のあそびの深さを、心に持っていたきたいと思えます。

静かに聴き下さつて、どうもありがとうございます。 (拍手)

〔配布資料〕

一 否といへど 強ふる志斐のが強ひ語り。このごろ聞かずてあれ恋ひにけり

(万葉集卷三 天皇御製)

二 否といへど 語れ語れと詔らせこそ、志斐いは申せ。強ひ語りといふ。

(万葉集卷三 志斐嫗)

三 安積山影さへ見ゆる山の井の 浅き心をわが思はなくに

四 難波津に咲くやこの花。冬ごもり今を春べと咲くやこの花

五 大和は 国のまほろば たたなづく 青垣 やまごもれる 大和しうるはし

(古事記 やまとたけるの命)

六 天地あめつしのいづれの神を祈らばか。うつくし母にまた言とはむ

(万葉集 防人の歌 大伴部麻与佐)

※旋頭歌『若葉の霊』は本文中に掲載してあるため省略しました。